國學院大學学術情報リポジトリ

A study of Atami Alligator Garden

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中島, 金太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000822

熱海鰐園に関する一考察

―静岡県動物園史上の意義―

中島　金太郎

キーワード
動物園　観光　見世物　温泉利用　熱海

はじめに

戦前期の静岡県内には、久能山東照宮宝物館や下田武山閣をはじめとする、複数の博物館施設が開館、設営されていた。しかしながら、これまで本県の博物館史については、体系的に叙述した論著が無いことから、未だ不詳館が数多く存在していることも事実である。

本稿では、昭和初期に存在が確認できる「熱海鰐園」を対象とした。静岡県下におけるワニ園は、賀茂郡東伊豆町に所在する熱川バナナ・ワニ園が有名であるが、同館の開館は昭和三三年（一九五八）であり、また所在地も異なることから別の施設と推察された。熱海鰐園は、文献記録が極めて少なく、博物館学の分野でもこれまで不詳の分野であったことから、本稿ではその沿革と活動について論究するものである。本研究の成果は、静岡県における動物園発達史の解明に繋がるものと予想している。その傾向分析から熱海鰐園の歴史上の

位置付けと意義について考察を試みるものである。

第一章　熱海鰐園とは

1　用語について

まず、当該施設の呼称・名称については、文部省社会教育局が昭和一五年（一九四〇）四月一日付けで刊行した『教育的觀覽施設一覽』では、「熱海鰐園」の名称が用いられている。[1] また、戦前期を代表するコメディアンである古川ロッパの記した『古川ロッパ昭和日記』では、「熱海養鰐園」を訪問したとの記載がある。[2]

又入浴して、女房と散歩、熱海養鰐園を見物、竹葉で食事、小沢のチャラ陸さん来り、無理に御馳走されちまふ。（傍線筆者）

一方、日本博物館協会の発行する『博物館研究』第十六巻第十二號では、全国博物館協議会および展示技術講習会の参加者として「熱海市鰐園長」の呼び名が確認でき、文部省一覧とは異なり「市」の文字が加えられている。[3] このように、掲載誌によって用語にばらつきが見られるものの、文部省一覧には同園が私立館であるとしていることから「熱海〝市〟鰐園」の記載は適切でないと思われ、また文部省による調査報告であることから信頼性が高いと思われる。このことから本稿では、『教育的觀覽施設一覽』に則って「熱海鰐園」の施設名称を用いるものとする。

なお本稿では、ワニを飼育する動物園全般を指す場合「ワニ園」、熱海鰐園を直截に指す場合は「鰐園」の表記を用いることとする。（ただし、文献引用時には原典標記を基本とする。）

2　熱海鰐園の概要

熱海鰐園は、戦前期の熱海市内に設立されたワニ園である。同園の記録は、前記した文部省社会教育局の『教育的觀覽施設一覽』に初めて確認することができる。[4] 同書には、和田浜海岸に設立されたとの記載が認められ、和田浜は昭和初期からの埋め立て工事が実施されており、正確な所在地を同定することはできなかった。また同書によると、開園は昭和十三年九月で職員は四名、前年度観覧人数は

二万五千人との記載が残っている。博物館の収蔵資料にあたる「陳列品ノ種類竝ニ點數」には、「魚類 二〇點」と記載されているが、古代日本における鰐＝サメというわけではなく、爬虫類のワニを二十頭飼育していたと見做すことができる。この理由として、抑々鰐をサメとして扱う風潮は、明治初期に文部省が発行した『國語讀本』において、古事記の「和邇」を「わにざめ」と表記したことに由来したもので[5]、『出雲国風土記』の「和邇」の記載や『延喜式』で示される「鰐」は、前後の文脈との関係からサメとは考えられないことから[6]、本来「鰐」とは爬虫類のワニを示す語と判断できよう。また、丸山林平が昭和十一年に刊行した『國語教材説話文學の新研究』では、鰐をサメの異称として扱うことを言語学・説話学の方面から否定しており、学際的にもワニとサメは異なるものとして扱われていたことも理由として挙げられよう。

熱海鰐園について特筆できるのは、その集客能力である。『教育的觀覽施設一覽』には、静岡県の施設として八つの館園が認められるが、熱海鰐園の入園者数は狐ヶ崎遊園地（十七万三千二百三十人）に次ぐ県内二位を記録している。しかしながら狐ヶ崎遊園地は、小規模な動物園・植物園を有していながらもその基本は遊園地であり、入園者の殆どは遊園地を目的に来たものと推察されることから、熱海鰐園は純粋なる動物園施設としては県内最多の入園者数を誇っていたこととなる。

この理由としては、当時より熱海が〝温泉観光地〟として周知されていたことに起因するだろう。大正十四年（一九二五）に国府津～熱海間を走る熱海線が開通し、神奈川方面からの交通の利便性が向上した。昭和九年には、丹那トンネルが開通したことによって、東海道本線が熱海駅を経由することとなり、首都圏は勿論、関西方面からもアクセス可能な保養・観光地としての熱海の発展が始まった。大正九年頃の熱海の状況を示した『熱海と五十名家』では、熱海は温泉地として名が売れているものの、来訪者を楽しませるための施設がほとんど無いことを複数の執筆者が嘆いており、特に野田惣八は鉄道の開通による観光客増加を見越した観光施設の必要性を説いている[7]。時代は下り、丹那トンネル開通後の昭和十年代の熱海市内には、ダンスホールや玉突き場（ビリヤード場）など様々な観光施設が誕生したことが見て取れる[8]。そして、熱海鰐園も観光施設の一つに位置付けられたものと看取される。しかし多くの観光施設は、お酒とともに楽しむ〝夜の観光施設〟であり、昼間開いている施設は熱海鰐園以外にはカフェが数件あるのみだったのである。実際、古川ロッパの日記にあるように、熱海鰐園は一般に開放した施設であったようで、熱海を訪れた観光客が気軽に観覧できる施設だったことも集客力を高める要因であったと思われる。さらには、熱海市内には昭和九年に熱海水族館が開館したものの、同十一年にはすでに閉館しており、

生き物を観覧する娯楽施設が市内に欠乏していたことから、珍奇なものを求める観光客心理も影響して熱海鰐園の集客力は高かったものと推測できる。

戦後の状況としては、ごく少数の書籍ではあるが鰐園経営の様子が確認できる。

昭和二五年に『採集と飼育』第十二巻第一号に寄稿された「熱海のワニ園」では、以下のような記載が見られる。(9)

然るに東京から汽車で2時間半程で行ける靜岡縣熱海市内に高野公英氏の經營するワニ園があつて、そこに行けば同じ種類のアメリカアリゲーターの成大者を26頭ほども見られる。私は昭和24年8月18日に見學したが、現在この小動物園の管理はあまり宜しくなく不潔で、動物の發育狀態も良好でない。

同論は、動物学者であった高島春雄による執筆で、はじめて熱海鰐園の状況について詳細が記載されている。高島の記載によると、上野動物園にも一頭のワニしかいなかった当時、まとまった数のワニを見学できる施設として熱海鰐園を紹介している。また同園の沿革については、「昭和13年11月3日別府市のワニ園から移しもたらした」とし、当初アリゲーター三十頭、クロコダイル三十頭をもって開園したとしている。その後、上野動物園からシナアリゲーター一頭を、昭和十四年には園主が南方へ旅行した際にサイパンからクロコダイル三十頭を輸入し、最盛期には九一頭のワニを飼育していたと記載されている。

ここで言うところの「別府市のワニ園」とは、大正十二年に開業した別府温泉の鬼山地獄である。鬼山地獄は、温泉地熱を用いてワニの飼育・展示に日本ではじめて成功した園であり、現在までも継続して運営が続けられている歴史の古い動物園である。熱海鰐園を経営していた高野公英なる人物の詳細を把握することはできなかったが、個人で経費の掛かる動物園を運営し、戦前期に海外渡航が可能であったことから、相応の地位と資金を有していた人物と推測される。高野は、何らかの形で別府の鬼山地獄を知り、同じ温泉地である熱海にて同様に温泉地熱によるワニ飼育を試みたのであろう。

しかしながら、『採集と飼育』に記載された時点の熱海鰐園は、動物園としてすでに斜陽化していたことが窺える。同誌の記載では、毎年八月に三〇～四〇個の卵を産むとあるが、今まで一度も孵化に成功したことが無いと伝えている。また、記事の掲載された昭和二五年に至るまでの三年ほどは温泉が湧出しないとあり、冬になると園内が氷に閉ざされ、耐寒性の高いアリゲーター以外が死滅したとも記載されている。これにより飼育数は、最盛期に比べ三分の一程度の数に減少したとしている。開園して十年余りで飼育生物が三分の一に

減少したことは、気候や社会背景の問題もあるにせよ、やはり動物園としての飼育環境が劣悪であったことが影響したものと推察される。前記引用で「管理はあまり宜しくなく不潔で、動物の發育状態も良好でない」と高島が断じているように、環境の不良から動物へ影響が出ていることが確認できる。開園十年で一度も孵化に成功したことが無いということは、ワニの生育状況が芳しくなかった点と、良好でない飼育環境に影響されたとも考えられ、結果的に飼育数の減少につながったのである。

この遠因としては、熱海鰐園の専門的職員の不在が挙げられよう。同園は、高野公英による私設動物園であったことは先の記載の通りである。高野は、個人で旅行した際にサイパンよりワニを仕入れているが、それ以外にワニの移入を行った形跡はなく、収集意識は希薄であったことが窺える。また、温泉による人工的な熱帯環境の整備を行い、ワニを飼育したとされているが、戦後温泉の湧出がなくなった際に暖房設備の追加などを怠り、飼育生物を大量に死なせてしまったことは、高野自身ワニの生態を詳しく把握しておらず、またそれを指摘できる知識を有する人材に欠けていたことが要因と考えられる。

先述の別府温泉鬼山地獄では、ワニの孵化と繁殖を行っていたことは、熱海鰐園開園時にワニを譲渡してもらったことからも伺える。また、後述の熱川バナナ・ワニ園の開園以前に、同園初代園長の木村亘が飼育の参考のために鬼山地獄を訪問しているなど、近似の時期に開園した鬼山地獄では、熱海鰐園と異なり孵化と繁殖に成功していたことがわかる。そして鬼山地獄は、現在まで継続して経営されており、温泉地熱を利用したワニ園というコンセプトは同様ながらも、孵化と繁殖への成功が園の継続性や経営にも影響していたと推測できる。

『採集と飼育』の記載に基づく熱海鰐園は、珍奇な生物を公開するだけの見世物の域を脱し切れていないものと判断できる。専門的知識に乏しくワニの大量死を招き、劣悪な環境から新たな出生ができなかったことは、生物飼育に重点を置いていなかった結果であると言える。このことから同園は、調査研究に基づく博物館たる動物園ではなく、動物展示によって人々を喜ばせるだけの古い段階の見世物的動物園であったことを如実に示しているのである。

一方、昭和二八年に熱海市が刊行した『熱海』には、以下のような記載が遺されている。[10]

「ワニ園」小公園の筋向いにある私設小動物園である。アフリカ産クロコダイル、南米産アリゲータなどワニを飼育し、毎年八月に産卵する。その他孔雀インコ鸚鵡から、熊猪猿鹿狐狸などの動物、竜舌蘭、そてて（ママ）、ドラセナなど珍奇な植物がある。

ここで記されている「小公園」とは、和田川の河口付近に所在した公園で、野外ステージを持ちイベントに活用するとの記載が残る。また同書の地図に記載があり、小公園の所在地は、現在の熱海市渚町二四番地に比定されることがわかった。この地図から推察すると、ワニ園は現在の熱海市清水町六番地の清水町駐車場の場所に所在したと考えられる。

昭和十五年の記録との相違点としては、ワニだけでなく鳥類・哺乳類・各種植物の飼育・栽培を実践している点である。当該記載を見る限りでは、ワニを中心とした熱帯園を目指したものと推定されるが、飼育哺乳類はイノシシ・シカ・タヌキ・キツネなど在地の動物に限られていることから、本格的な熱帯園には成り得なかったのであろう。

熱海鰐園に関する最後の記録は、先の高島春雄が『山階鳥研報』第7号に掲載した「日本のワニ」である。同書には以下のような記載が遺されている。[11]

大正、昭和となり国内の動物園、水族館、巡回動物園はもとより好事家が個人で飼養した場合もあり別府市鬼山地獄や熱海市高野鰐園では温泉を利用して皮革生産を目的に養殖が行われたりした。（中略）熱海のは戦後はただ飼育だけしていたが経営困難で2年程前閉鎖されたのは惜しい。

当該記述では、熱海鰐園は皮革生産を目的にワニの養殖を行ったとしているが、この記載には疑問が残る。そもそも高島自身が昭和二五年に述べた『採集と飼育』の記事には、昭和十三年開園の際に上野動物園からワニを一頭譲渡されたとしている。皮革を生産するための施設に、わざわざ動物園から動物を譲渡するだろうか。ましてや恩賜動物園から、生物を殺して生産活動に資する施設に譲渡などしないだろう。また、日本博物館協会の会合に博物館の一として参加していたことや、戦前に古川ロッパが見学していたこと、『採集と飼育』に入場料「大人二〇圓、子供一〇圓」を設定していたことなども加味すると、やはり一般公開を目的とした動物園として運営してきた施設と見做せるのである。設立当初の計画や、ワニの繁殖がスムーズに行われた場合には、飼育したワニの一部を皮革生産に用いることを考慮した可能性はあるが、現実的にワニの大量繁殖には失敗し、あくまでワニを見せる観光型動物園として運営されたのではなかろうか。

戦後の熱海鰐園は、経営困難により同書記述の二年程前に閉鎖されたとの記載がある。同書の刊行は、昭和三〇年十二月であり、記事から判断すると鰐園閉鎖は昭和二八年中である。先に挙げた『熱海』は、昭和二八年五月の発行であり、そのころはまだ運営されていたことから、同園の閉鎖は二八年後半以降であると推定できよう。

このように、熱海鰐園の記録は断片的に残されているのみである。同園跡地は、閉園後どのような用途で用いられたかは不明であるが、現在は駐車場とビルに転換されている。今回、閉園時期については把握できたものの、生体資料であるワニや諸動植物の処遇については確認することできなかった。閉園当時、まだワニは希少な生物の一つであり、どこかの動物園に移管されたのか、それともベルトやバッグなどの鰐革製品になってしまったのかは定かではない。

また、『教育的観覧施設一覧』と『採集と飼育』で開園時期が二ヶ月ずれることや、『教育的観覧施設一覧』『博物館研究』『採集と飼育』で園長名が異なっていることなど、いくつか解決しきれない問題がある。これらの問題については、今後の課題としたい。

さらに、昭和三三年に開園した東伊豆町の「熱川バナナ・ワニ園」との関係についても言及したい。同園は、「温泉の地熱を利用して温帯性植物を育て、そこにワニをはじめとした爬虫類を飼育展示する」というコンセプトを持ち、一方東京農業大学と協力した研究体制を持っていることから、観光と研究を上手く両立した施設である。熱海鰐園と熱川バナナ・ワニ園は、温泉地熱利用・ワニ・熱帯植物といったキーワードが共通し、熱海鰐園が閉鎖された昭和二八年から五年後にバナナ・ワニ園が開園しており、この時期の一致や伊豆東海岸という比較的近接した地理関係など、両者に関連性があるものと推測された。

しかし、熱川バナナ・ワニ園が発行した『熱川バナナ・ワニ園30年の歩み』によると、同園の始まりは、初代園長の木村亘が観光地熱川の宣伝のために各地を飛び回っている中で、懇意にしていた動物商からメガネカイマンの子を購入し、それを自宅で飼い始めたこととされている[12]。木村は、温かく風光明媚で太陽の豊かな恵みを受けた土地柄の熱川のイメージを具現させる方法を考えており、その南洋的な風土を表現するためにバナナ園の設立を企図した。また、動物商から購入したワニを飼育している最中に、別府温泉の鬼山地獄を見学する機会があり、そこに記された「日本一のワニ」の文字に反骨心を覚え、それを超えるワニ園を作るという意思を持ったようである。そして、バナナとワニを組み合わせた、南国的な雰囲気を出せるユニークな植物園としてバナナ・ワニ園が完成したのであった。

熱海鰐園と熱川バナナ・ワニ園は、共に別府温泉の鬼山地獄に影響を受けて設立された組織であり、近似の要素を持ち合わせているものの、直截な関係性を持たない別組織であることがわかった。バナナ・ワニ園の記録を調べても、二〇頭を超える成熟したワニを導入したとの記事は確認できず、熱海鰐園からはワニが引き継がれなかったのである。そして、熱川バナナ・ワニ園の成功に伴い、熱海鰐園の存在は忘れ去られ、現在ではほとんど知る者はいないのである。

第二章　静岡県動物園史における熱海鰐園の位置付けと意義

1　静岡県動物園史の概観

静岡県下における動物園は、大正八年（一九一九）の静岡博覧会に初めて動物園が設けられ[13]、また常設動物園としては、昭和二年（一九二七）に狐ヶ崎遊園に動物園が設置された[14]のが端緒である。戦後になると、県内各地に動物園が設立された。表1は、これまで県内に設立された常設の動物園を一覧にしたものである。この表を参照すると、平成初頭からの約十五年間を除き、断続的に動物園の開園・運営がなされてきたことがわかる。

本県の動物園は、端緒となる狐ヶ崎遊園地動物園から平成二四年（二〇一二）に開館した体感型動物園 iZoo まで、二三園の動物園が開館運営されてきた。日本国内に設置・運営された動物園数は、歴史的な推移を含めると正確に把握することはできないが、日本博物館協会による「平成二六年度博物館館園数関連統計」では、動物園が七九園、動物園・水族館・植物園の複合施設が二七園現存している[15]。その中で静岡県内の設置数は合計六園であり[16]、その数は東京都・兵庫県の七園に次ぐ数を誇り、全国的にも動物園の設置数が多い地域であることが窺える。また、上表の二三園中十八園が東部地域に、その内十三園が伊豆半島に集中するという特徴がみられる[17]。

本県に多くの動物園が設置され、また大半が東部・伊豆地域に集中している原因は、やはり動物園は観光施設としての把握であり、観光地を構成する資源の一つとして選択されたことが窺える。これは、昭和三〇年代以降、特に顕著な傾向として認められることは、我が国のモータリゼーションの急速な発展に伴う〝観光〟の発展と輝を一にする。

昭和三〇年代以前に開館した動物園では、また異なる傾向が認められる。昭和二年開園の狐ヶ崎遊園地は、静岡電気鉄道（現、静岡鉄道株式会社）が設立した遊楽施設で、動物園は遊園地の一施設として植物園と併せて運営されてきた。昭和二五年開園の浜松市動物園は、市制四〇周年を記念して開催された浜松こども博覧会のパビリオンに端を発するもので、昭和二七年設立の三島市の動物園は市立公園である楽寿園の中に郷土館などと共に設置された施設である。これらの動物園は、別用途の施設や事業に付帯しての設置という傾向を見出すことができ、とりもなおさず動物園設立を直截に意図した計画ではなかったと看取される。

開園年	設立地	名称	現状
昭和２年（1927）	静岡市	狐ヶ崎遊園地動物園	平成５年閉園
昭和13年（1938）	熱海市	熱海鰐園	昭和28年頃閉園
昭和25年（1950）	浜松市	浜松市動物園	昭和58年に現在地へ移転
昭和27年（1952）	三島市	三島市楽寿園内動物園	現存
昭和32年（1957）	熱海市	ひぐち動物園	昭和36年閉園
	掛川市	加茂花菖蒲園 （現、加茂荘花鳥園）	現存
昭和33年（1958）	東伊豆町	熱川バナナ・ワニ園	現存
昭和34年（1959）	伊東市	伊豆シャボテン公園	現存
昭和37年（1962）	小山町	富士高原自然科学苑	閉園（閉園年不明）
昭和39年（1964）	富士宮市	西富士小田急花鳥山脈	平成10年閉園
昭和40年（1965）	伊東市	伊豆コスモランド	伊豆サファリ公園に改修
昭和44年（1969）	南伊豆町	石廊崎ジャングルパーク	平成15年閉園
昭和44年（1969）	静岡市	静岡市立日本平動物園	現存
昭和45年（1970）	伊豆市	天城猪苑	平成20年閉園
昭和48年（1973）	伊東市	伊豆サファリ公園	伊豆ぐらんぱる公園に改修し現存
昭和52年（1977）	東伊豆町	伊豆バイオパーク	伊豆アニマルキングダムに改修
昭和55年（1980）	裾野市	富士自然動物公園 （富士サファリパーク）	現存
昭和61年（1986）	河津町	伊豆アンディランド	体感型動物園iZooに改修
平成２年（1990）	富士市	富士国際花園 （現、富士花鳥園）	現存
平成15年（2003）	掛川市	掛川花鳥園	現存
平成22年（2010）	東伊豆町	伊豆アニマルキングダム	現存
平成24年（2012）	伊豆の国市	IZU・WORLD みんなのHawaiians動植物園	現存
平成24年（2012）	河津町	体感型動物園iZoo	現存

表１　静岡県内に設立された常設動物園（※ごく小規模な動物展示コーナーは除く）

昭和三〇年代以降の動物園は、明確な意図を持って設立されたもので、ほとんどの施設は観光地への集客力拡大を目的としていたのである。昭和三〇年代後半から始まる高度経済成長は、庶民の余暇の過ごし方を変化させた。昭和三六年には、伊豆急行が営業を開始し、それまで伊東までしか繋がっていなかった電車が下田まで延伸された。また昭和三九年には、東海道新幹線が東京～新大阪間で開通し、静岡県内には熱海・静岡・浜松の三駅がまず開通した。このような社会背景も影響し、伊豆地域は、首都圏からほど近い保養地・観光地としてそれまで以上に発展を始め、特に熱海をはじめとする伊豆東海岸は、新婚旅行などを目的に多くの人々が訪れることとなった。そして、観光客が来静中に訪れるための娯楽・観光地の地として数多くの施設が企図され、その一環に博物館施設が位置づけられたのである。これが、静岡県での所謂観光型博物館と称される博物館の始まりであり、特に美術館、植物園、動物園に関しては観光要素が色濃く出ているのである。実際、昭和三三年開園の熱川バナナ・ワニ園は、東伊豆町の熱川温泉に宿泊に来る観光客の利用を意図して開園したとされており[18]、また伊豆シャボテン公園ではチンパンジーのショーなどの催事を積極的に実施しているなど、飼育・繁殖よりも如何に来館者を楽しませるかという面を意識しているように感じられる。

昭和四四年には、東名高速道路が全線開通し、自家用車による来静が容易になると、郊外型の大型動物園が増加する傾向にある。裾野市に所在する富士サファリパークのように自家用車で園内を巡ることのできるサファリ形式の動物園の誕生や、伊豆アンディランド、伊豆バイオパークのように電車アクセスでは最寄り駅からさらにバス・タクシーを利用する必要のある施設が発生し、とりもなおさず自家用車による観光を見据えた動物園が広がりを見せるのである。これらの動物園は、一ヶ所で長時間の滞留を促す施設であり、温泉入浴のついでに訪れるなどの従来の形式に対し、〝動物園に行くこと〟を観光の目的とする新しいタイプの動物園であったのである。当該形式の動物園は、車によるファミリー層の来園を意識したとも看取され、通常の動物展示のほかに〝ふれあい動物園〟などのより動物を身近に感じさせる展示が増加し、またレストラン、土産物やなど動物園内の付帯施設の発達を促進したといえる。郊外型の動物園は、昭和四〇年代より日本全国で増加する傾向にあり[19]、その中でも多数の開園数を誇ることから、これらの動物園は時代に即応した先見性を有していたのである。このように静岡県の動物園は、とりもなおさず〝観光〟を核に据えており、観光の発展と共にその数が増加していったのである。

観光型動物園が主流である傾向には、日本人の動物園観が大きく影響すると思われる。抑々動物園の源流は、権力者が自分の権力の及

ぶ範囲を示すために、勢力下の地域から様々な動物を集めてそれを観覧に供したことにはじまり、その歴史は古代中国の殷周時代に遡るほど古い。[20] しかし石田戢は、近世以前の我が国では、自国産の動物・鳥類・昆虫の飼育例は見られるものの、異国の生物を飼育してそれを見せる行為は見出すことができないとしている。島国である日本は、自国内で勢力争いはしても、全く環境の事なる地域を占領・統治することは殆ど無く、当然上記のような権力範囲を示すための動物展示意識は希薄であった。このことから、我が国の動物園は海外とは異なるアプローチで誕生したとされる。

我が国の動物園の始まりは、やはり江戸期を中心に開催された「見世物」に比定できよう。見世物は、常人とは懸け離れた技能を持つ人々や珍奇な動物・植物、精緻な工芸品などを展示し、対価を払ってそれらを観覧させる民衆の娯楽である。昭和三年に刊行された朝倉無聲の『見世物研究』では、その歴史について以下のように概観している。[21]

室町時代には、未だ見世物の名目はなく、たゞ奈良時代に支那から傳來した散樂雜戯の流れを汲んだ幻術を初め、放下や蜘舞が時々寺社の境内に勸進せらるゝに過ぎなかつたのであるが、江戸時代となつて初めて香具職頭家に、天然奇物類の觀場設置を許可せられ、見世物小芝居の名目が生じたのは、實に元和偃武以後の事であつた。

同書によると、見世物自体は室町時代には見られるものの、本格的な隆盛は大坂夏の陣以後であるとされた。『見世物研究』には、江戸期に見世物に供された珍獣類の記述が多くあり、寛永年代作『露殿草子』京都四條川原小芝居の條に「山ぶた」を見せたとの記述と、同時期の『洛陽小芝居屏風』に京都四條川原の見世物小芝居にて孔雀を展示したとの記述が、動物見世物の最古の記録としている。その後、寛政年代より浅草と両国、大阪の下寺町と名古屋の末広町などに「孔雀茶屋」「鹿茶屋」「陳物茶屋」「花鳥茶屋」などが設けられたとした。これらの施設は、孔雀や鹿などの珍しい鳥獣類を観覧しながら茶を楽しめ、また雨天休業することの多かった見世物小屋とは対照的に、雨天観覧が可能であったことから隆盛を極めたとされている。朝倉は、特定の場所に動物を常設的に展示し、一般市民の観覧に供するこれらの茶屋を「動物園の先驅をなすもの」と断じたのであった。

幕末から明治初期にかけて催行された遣欧使節団は、欧米諸国を見聞する中で博物館や動物園を見学し、様々な記録を遺している。団員の日記には、「Zoological Gardens」を「遊園」「禽獣園」「禽獣飼立場」「鳥畜館」など多様な訳語が遺っている。[22] 江戸期以前の本草学では、哺乳類を獣、鳥類を鳥や禽と称していたことから、上記の訳語となったのであろう。「動物園」の語は、慶應二年（一八六六）に

福沢諭吉が発刊した『西洋事情』にて初めて用いられ、以下のように記している。[23]

動物園には生ながら禽獣魚虫を養へり。（中略）總て世界中の珍禽奇獣、皆此園内にあらざるものなし。之を養ふには、各々其性に從て、食物を與へ、寒温湿燥の備をなす。

「Zoological Gardens」は、直訳すると「動物学園」（動物学＝Zoology）であるが、福沢の記録においても「珍禽奇獣」を集める施設との認識であり、学術的な施設との認識は希薄であったことから、「学」の字が付けられなかったのであろう。そして、動物園の名称は、上野動物園の開館を機に全国的に普及したのであったが、学術的な組織との認識は広まらなかったのである。実際、開園当時の上野動物園は、クマやシカ、タヌキなど当時まだよく見られた動物の展示が中心であり、それほど入園者数は振るわなかった。しかし、明治十九年にチャリネ曲馬団からトラの子どもを手に入れたことで、翌二〇年には前年比1・5倍の約二四万人の来場者があり、また二一年のゾウ来日、二七年のフタコブラクダ来日などを機に、明治二八年には四六万人の入園者数を記録するなど、珍獣が来日するとともに動物園の人気は高まっていたのである。[24] やはり一般市民は、海外産の珍しい動物を求め、娯楽・慰安のための施設として動物園を捉えていたのである。

大正期から昭和戦前期にかけて、主要な地方自治体が動物園を開園させたほか、関西では私鉄の多くが沿線上にこぞって動物園を続々と開園させた。天王寺動物園で実施されたチンパンジーのリタのショーを機に、多くの動物園で動物芸やパフォーマンスが行われた。また民営動物園は、遊園地と併存する例が殆どであり、当初より遊戯施設として計画されるなど、動物園の娯楽施設化が進んでいったのである。戦時中は、猛獣処分などで一時期活動が停滞するものの、戦後復活した我が国の動物園は、動物を中心とした慰安の地としての性格を強めていくのである。[25]

このように、我が国では、江戸時代より珍奇な動物を観覧する娯楽が発達しており、民衆の中にも「動物の観覧＝娯楽」との意識が存在したと思われる。江戸後期になると、江戸・大阪・京都などの大都市圏で孔雀茶屋などの常設の動物展示施設が定着し、[26] 動物を特定の施設に見に行くという感覚が広まっていったのである。このことが、近代日本人にも引き継がれ、動物園は動物を観覧するための観光・娯楽施設としての認識へつながる要因となったと考えられる。明治維新後は、海外から動物園の理念が輸入されたものの、珍獣を求める江戸時代以来の民衆心理が影響し、動物園側も外国産動物の購入に傾倒していくこととなる。大正期以降は、民間資本の参入などもあっ

てより動物園の娯楽施設化が進んだ。この時代に醸成された、「珍獣を見せる」「市民の慰安・娯楽のための施設」という動物園観は、この後も日本人の中に残り続け、今日に至っていると思われる。そして、日本人の動物園観に則った観光型動物園が、現在も多数存在しているのである。

一方、バブル経済が終息した平成初年代は、全国的な不況とそれに伴う伊豆の観光業の冷え込みもあって、動物園の新設はなされなかった。しかし、伊豆アンディランドや伊豆バイオパークは、平成二〇年代に入りそれぞれリニューアルに成功している。両園は、開園から三〇年弱の年月が経過し、施設は老朽化、展示も陳腐化していた。そこで、前者は動物商で爬虫類の専門家である白輪剛史氏に、後者は「のぼりべつくま牧場」などを経営する加森観光株式会社に施設及び経営権が移管され、コンセプト変更や施設の刷新を図り、新たな動物園として生まれ変わったのである。特に伊豆バイオパークをリニューアルした伊豆アニマルキングダムは、平成二二年四月二九日から五月五日の入場者実績が、リニューアル前の同時期の入場者数に対して二倍を記録したとされており、[27] 現在までも良好に運営されていることから、効果的なリニューアルであったと看取される。

一方、リニューアルに疑問の残る施設も存在する。一例として、伊豆洋らんパークを改修し、平成二四年に開園したIZU・WORLDみんなのHawaiians動植物園が挙げられる。伊豆洋らんパークは、名称の通り蘭の栽培・公開を行う植物園として開業し、旧大仁町域の拠点的な観光施設の一つであった。平成二〇年頃よりカピバラや鳥類などの動物展示を始め、実質的に動植物園として運営されてきた。この施設が引き継がれ、IZU・WORLDみんなのHawaiiansでも動植物園として運営がなされている。旧伊豆洋らんパーク時代に開始した動物展示は、時代の流れと共に蘭の展示だけでは集客効果が見込まれなくなり、その対策として導入したものと思われる。平成二四年のリニューアルの際には、蘭以外にも熱帯植物の展示に力を入れはじめ、新設コンセプトである〝伊豆にあるハワイ〟に即した展示変更がなされている。しかし、旧施設から引き継がれた動物展示は、新設コンセプトに即さない種類のものが大半であり、植物園の構成とも違和感を生じる点が多々見られる。抑々、洋らんパーク時代にテコ入れとして動物展示を導入した際も、一方で付帯事業であるバイキングレストランなどの商業経営にも重点を置いており、動植物園と商業施設のどちらが主体であるかが解りづらかった。平成二四年のリニューアルでは、これまでと全く異なるコンセプトを打ち立てつつも、施設の半分程度が洋らんパークからの継続であり、より統一性の薄れた施設になってしまったのである。ただ、動植物の飼育状況に関しては良好な状態が保たれており、また以前に比べポップで明るい感を押

し出した広報戦略から、来園者が入園しやすくなっているようにも思われる。このように、リニューアルの効果についても感じられる点はあることから、今後も細かく設備更新を行い、コンセプトに準じた独自性を持ち合わせた動植物園としていくことが肝要である。

また本県の動物園は、植物園と融合した施設として設立される傾向が強い。具体的には、狐ヶ崎遊園地、熱海鰐園、加茂荘花鳥園、熱川バナナ・ワニ園、伊豆シャボテン公園、富士高原自然科学苑、西富士小田急花鳥山脈、伊豆コスモランド（伊豆サファリ公園を含む）[28]、富士花鳥園、掛川花鳥園が動植物園タイプの博物館である。

静岡県内の動植物園の傾向としては、熱帯地域・亜熱帯地域の植物と動物飼育を組み合わせる施設が目立つ点である。当該傾向は、伊豆地域に顕著であるが、この範疇には熱海鰐園、熱川バナナ・ワニ園、伊豆シャボテン公園、石廊崎ジャングルパークが含まれる。また、熱帯地域・亜熱帯地域の植物を栽培する施設としては、伊豆薬用植物栽培試験場、下賀茂熱帯植物園、伊豆グリーンパークなどが設立され、伊豆地域には総じて熱帯植物に関連する施設が多かったのである。この原因としては、伊豆半島全域から湧出する豊富な温泉資源が深く影響している。伊豆半島は、半島域に数多くの火山を有しており、その影響により半島全域で温泉が湧出する。この温泉資源は、近代以前は主に入浴に用いられてきたが、明治末期頃には伊東で椎茸の促成栽培を行うために温泉熱が利用され[29]、入浴以外の活用方法が模索され始めた。温泉の作物栽培への利用は、同じく温泉地である大分県別府市で盛んに実践されており、大正期にはすでに安定した栽培が行われていたようである[30]。伊豆半島においても戦前～戦後にかけて温泉利用の栽培が開始され、写真技師で絵はがき用写真を多く撮影した上田彦次郎の写真の中にも温泉利用の温室を確認することができる[31]。そして、この技術を援用して、高温地域である熱帯・亜熱帯の植物栽培を実現させたのである。一方で温泉熱は、動物飼育にも活用された。伊豆半島では、特にワニやカピバラなどの飼育に導入され、高温地域の生物の飼育と繁殖に寄与している。豊富に得られる温泉水は、温室や飼育プールなどを温めるのに使用され、高温地域に生息する動物の飼育環境を整えるために効果的だったのである。このように、特定の動植物の飼育に温泉が効果的であることから、伊豆半島に熱帯・亜熱帯をテーマとした動植物園が林立したのである。

また伊豆半島は、冬でも温暖な気候に恵まれた地域であり、首都圏にほど近い〝南国〟的な避寒地・観光地として位置付けられていた。特に東海岸は、ヤシやソテツなどが街路樹として植樹され、また昭和三〇年代に新婚旅行のメッカであった熱海は、海岸線がハワイに似ているとのことから〝東洋のハワイ〟とも呼ばれるなど、南国のイメージ付けがなされていたのである。熱帯植物園は、本物の南国地域

に繁茂している植物を栽培・展示することで、観光客に南国の疑似体験をさせることを目的とし、さらに植生だけでなく生物を組み込むことで、さらなる印象付けを目論んだと推定される。また、他の動物園で見られない熱帯・亜熱帯の動植物を見られると宣伝し、観光として訪れるべき価値のある施設を印象付けるために、このような動植物園が多数設立されたものと看取される。

小結

静岡県の動物園は、博覧会や遊園地などの附属施設からスタートし、観光地からアクセスの良い一観光資源としての施設を経て、郊外に設立される大型独立館タイプの動物園へと推移してきた。また伊豆半島では、固有の自然環境と天然資源をうまく活用した動植物園が広く普及し、現在に至るまで運営され続けてきたことがわかる。本県の動物園は、観光に資する施設として発展してきたことから、営利的かつ娯楽的な要素が強く、とりもなおさず研究機関である博物館としての認識は希薄であることが歴史的にも理解できよう。

前表の通り、本県に現存する動物園施設は、開園から多くの時間が経過し、おしなべて老朽化が進んでおり、動物の入れ替えや配置換えだけでなく根本的なリニューアルが必要な時期であると思われる。また、熱川バナナ・ワニ園のように、飼育・研究の面で良好な成果を残している園も少なくはない。今後の展望としては、より魅力的で集客力の高い動物園を目指すために、展示や活動が陳腐化しないよう更新性を持たせることが肝要である。これは、従来不十分であった研究成果のフィードバックを徹底し、誰にでも解りやすく伝わるような工夫を行い、単なる観光施設に留まらない〝博物館〟としての動物園運営が必要であると断じ得よう。

2　静岡県動物園史上の熱海鰐園

これまで、静岡県内に誕生した動物園とその傾向について概観した。これを踏まえ、静岡県動物園史上の熱海鰐園について考察を加えてみたい。本県動物園史における熱海鰐園は、動物園発展の第二段階である「観光地からアクセスの良い一観光資源としての施設」に比定できよう。熱海鰐園は、観光地の構成資源としての性格を有する施設として、県内の動物園としては最も早い設立である。静岡県内では、昭和三〇年代後半の経済成長と新幹線開通に前後して、第二段階の動物園の増加が始まる傾向にある。これに対し熱海鰐園は、その二〇年近く前に同様の性格をもって設立されたのである。この理由としては、観光地としての熱海の発展が、他の地域と比較して早い段

階からなされてきたことに起因するだろう。抑々熱海線の開通以前は、政治家や軍人など限られた層が訪れる別荘地・保養地として活用され、その利用者数も限定的であった。その後、大正十四年に熱海線が開通し、また昭和九年の丹那トンネル開通によって東海道本線が熱海駅に停車するようになると、関東圏は勿論、関西からもアクセスが容易となった。このことが影響し、熱海は限られた人々の訪れる別荘地から、多くの人々の訪問が可能な観光地へ転換していったのである。熱海鰐園は、この熱海の観光資源の一つとして運営されてきたのである。

抑々戦前期には、一般庶民が旅行を楽しむことは経済的に困難であり、観光地そのものが希少であったことから、とりもなおさず観光資源としての施設も少なかった。昭和三〇年代以降、景気の上向きによって庶民にも経済的な余裕が生まれたことから、庶民にも旅行が浸透し、それに伴い全国で観光地の開発が始まったといっても過言ではない。一方熱海は、丹那トンネルの開通に伴い、首都圏に近い気軽な保養地として、富裕層は勿論庶民に至るまで多くの人々が訪れるようになったのである。[32] 実際、丹那トンネル開通前には、一日平均五七二〇人の乗客数であった熱海駅は、開通後には平均一万千百人と二倍近くの乗客数に増加し、昭和十一年には年間の訪問客数が百二十三万人を数えたとのデータが遺されている。[33] 熱海では、観光客の増加に対応して様々な娯楽施設が企画され、昭和十二年の熱海宝塚劇場開設をはじめ、多くの娯楽施設が誕生した。そして熱海鰐園は、観光客に驚きと発見を提供する施設として運営されたのである。同園は、本県初の本格的な観光都市である熱海の発展と共に生まれた、県内初の観光型博物館に位置付けられるのである。

熱海鰐園の持つ意義としては、ワニという単独テーマの展示を行う最初期の動物園だったことである。日本列島には、原生種のワニは生息せず、第二次世界大戦中に南洋諸島を占領した際に、一時期国内にもワニが生息する状況があったものの、相対的にワニは珍しい存在であった。しかし、近代以前にも我が国にワニが存在した記録は確認することができる。高島春雄が昭和三〇年に発表した「日本のワニ」において、日本の近隣では中国に二種のワニが存在し、それぞれ華中から長江下流域に生息するシナアリゲーターを鼉竜（だりょう）、華南に生息するイリエワニを蛟竜と称されていることを述べた。[34] そして、延享元年（一七四四）に薩南諸島の硫黄島にてワニが捕獲された記録があり、また山階鳥類研究所が所蔵する図譜の中に寛政十二年（一八〇〇）二月に琉球大島で捕えたとされるワニ図が遺存していることを紹介した。高島は、これらのワニをイリエワニと断定し、海を渡って日本にまで到達したとしている。イリエワニは、汽水域や海岸にも生息する大型のワニで、海水に耐性が強いことから海流に乗って様々な地域へ移動する性質がある。この性質と絵図の特徴などに基づ

き、高島は判断したとしている。続いて昭和七年には、富山県四方町の漁船が操業中、曳網をした際に六〇センチメートルほどのワニを捕獲したと記載しており、野生のワニが偶発的に日本に漂着する例は少なからず存在していたのである。

しかし、江戸期の見世物として「鰐」を展示した例は確認できなかった。斎藤月岑が、江戸から明治初期の開帳や見世物などについて記録した『武江年表』[35]においてもワニの記載を見つけることはできず、また先述の『見世物研究』や、昭和五七年の『図説庶民芸能－江戸の見世物』[36]などの見世物研究書にも確認することができなかった。先述の高島は、「乾燥して標本のようにした物、液浸の標本等は稀に舶来したが活きたワニが来たかどうかは明かでない。ことによると明治になって来たのが始めかも知れぬ。」と記しているように[37]、明治以前には生きたワニは極めて珍しく、それを展示した例は皆無だったのである。

近代に入っても、生きたワニを展示する施設は全国的に僅少であった。日本国内での生きたワニの展示は、明治三六年（一九〇三）の第五回内国勧業博覧会に設けられた余興動物園が確実な事例であり[38]、またワニを常設展示する施設は大正七年に開業した愛知県の鶴舞公園附属動物園であった[39]。このほかに、別府温泉の鬼山地獄など日本国内でわずかに飼育・展示事例は確認できるものの、首都圏近縁の一般市民が気軽にワニを観覧できる施設は僅少だったのである。このような時代背景に基づいて鰐園は設立され、実物のワニを見慣れずテレビの普及もない時代において、鰐園は非常に珍奇かつ驚きと発見を提供する場になり得たのである。

また、〝鰐園〟と特定の生物を名称に冠する動物園としては、管見の限り全国初の施設と思われる。水族館では、明治四一年（一九〇八）に兵庫県に開館した舞子介類館が特定名称を用いた端緒である[40]。また宮城県に昭和五年に開館した鯨館は、実態としては捕鯨資料と標本を展示する自然史・民俗混交の博物館であり、生体展示はなされていなかった[41]。また先述の鬼山地獄は、温泉熱を利用して飼育動物をワニに限定した、単一展示型動物園の嚆矢と考えられるのだが、具体的な名称として〝ワニ園〟の語を用いておらず、あくまで別府温泉の名所である〝地獄〟の一つに位置付けられている。このように熱海鰐園は、単一動物の飼育・展示を謳った初めての動物園であり、戦後一定の増加が見られる特定生物のみを飼育する動物園の先駆けとなった存在であるといえる。

おわりに

熱海鰐園は、昭和戦前期から戦後すぐにかけてのごく限られた期間のみに存在した動物園であった。同園は相対的に規模が小さく、活動も限定的であったことから、その記録はほとんど遺されておらず、顧みられることも少なかったのである。しかしながら、戦前期において数少ないワニを展示する施設であり、また単一展示を謳う名称を付けた動物園の嚆矢に位置付けられることから、その果たした役割は大きいと思われる。

一方、静岡県動物園史においては、博覧会などのイベントや他の施設に付帯しない単独開園した初の動物園であった。そして同園は、観光地熱海を構成する観光資源の一つに位置付けられたのである。本県の動物園は、飼育や研究に力を入れている施設はあるものの、動物を見せて来園者を喜ばせることを重視した観光施設としての傾向が強い。熱海鰐園は、本県における観光型動物園の濫觴であると同時に、それまで県内で飼育事例の無かったワニの飼育を試みたことが先進的であり、その後の動物園発展の一端となったことが特筆に値するのである。

注

（1）文部省社会教育局　一九四〇『昭和十五年四月一日現在 教育的觀覽施設一覽』　十一頁

（2）古川ロッパ著、滝 大作監修　一九八七『古川ロッパ昭和日記・戦前篇』晶文社　六五八頁

（3）日本博物館協會　一九四三「全國博物館協議會」『博物館研究』第十六巻第十二號　四～五頁

（4）注1と同じ

（5）丸山林平　一九三六「和邇傳説」『国語教材説話文学の新研究』藤井書店　七九～一一九頁

（6）榎村寛之「斎宮百話 第28話　わになって踊るか?」斎宮歴史博物館HP：http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/saiku/hyakuwa/journal.asp?record=28

（7）野田惣八　一九二〇「住民としての望み」『熱海と五十名家』精和堂　一三九～一四六頁

(8) 熱海市史編纂委員会編　一九六八「第三章　温泉観光都市への展開」『熱海市史』下巻　一六〇～一八一頁
(9) 高島春雄　一九五〇「熱海のワニ園」『採集と飼育』第十二巻第一号　十七頁
(10) 熱海市役所　一九五三『熱海』一六六～一六七頁
(11) 高島春雄　一九五五「日本のワニ」『山階鳥研報』第7号 山階鳥類研究所　三〇〇～三〇二頁
(12) 熱川バナナ・ワニ園　一九八九「バナナ・ワニ園の設立」『熱川バナナ・ワニ園30年の歩み』九四～九七頁
(13) 静岡民友新聞社　一九一九「静岡博覧會案内」『静岡民友新聞旬刊附録』大正八年八月一日
(14) 静岡鉄道株式会社　一九八九『写真で綴る静岡鉄道70年の歩み』八三頁
(15) 日本博物館協会　二〇一六「平成二六年度博物館館園数関連統計」『博物館研究』Vol. 51 No. 4
(16) 表1では十二園の動物園が現存と記載したが、日本博物館協会の統計では動物園に含んでいない施設であっても、実際の活動は動物園の要素を含む施設もあるので、総数に齟齬が出ている。
(17) 但し、昭和四八年の伊豆サファリ公園は昭和四〇年開園の伊豆コスモランドを改修した施設であり、伊豆平成二二年の伊豆アニマルキングダムは昭和五二年開園の伊豆バイオパークを改修した施設、また平成二四年の体感型動物園iZooは伊豆アンディランドをリニューアルした施設であることから、実質的な新規設立数は二一園である。
(18) 静岡県博物館協会編　一九九九『しずおかけんの博物館』静岡新聞社　四四頁
(19) 石田戢　二〇一〇『日本の動物園』東京大学出版会　九〇～九三頁
(20) 注19と同じ　十二～十五頁
(21) 朝倉無聲　一九二八『見世物研究』春陽堂（一九七七年の思文閣出版復刻版より）一頁
(22) 注19と同じ　三〇～三二頁
(23) 福沢諭吉　一八六六『西洋事情』初編巻之一
(24) 東京都恩賜上野動物園編　一九八二『上野動物園百年史』
(25) 注19と同じ

(26) 若生謙二　一九九三『日米における動物園の発展過程に関する研究』（博士論文、国立国会図書館デジタルコレクションより）
(27) 「平成二二年第三回（五月）臨時会 東伊豆町議会会議録」の町長挨拶より抜粋
(28) ただし、現在の伊豆ぐらんぱる公園には動植物展示が無いことから、現存施設はこの範疇に含まれない。
(29) 日本温泉協会　一九四一「第十一章 温泉の産業的利用」『日本温泉大鑑』博文館　五九三頁
(30) 別府温泉地球博物館　二〇一五『別府温泉産業・文化遺産 温泉熱利用促成栽培に挑んだ人々』
(31) 日本大学国際関係学部図書館所蔵 上田彦次郎ガラス乾板 デジタルアーカイブ「下賀茂温泉の湯煙」より
https://www.ir.nihon-u.ac.jp/lib/glassplate/south_01.html
(32) 竹田尚子、文貞實　二〇一〇「第七章エンターテイナーの演出―芸妓さんと見番」『温泉リゾート・スタディーズ 箱根・熱海の癒し空間とサービスワーク』青弓社　一四〇頁
(33) 注8と同じ　一六九頁
(34) 注11と同じ　三〇頁
(35) 斎藤月岑（今井金吾 校訂）二〇〇三『定本武江年表』上～下 筑摩書房
(36) 古河三樹　一九八二『図説庶民芸能―江戸の見世物』雄山閣出版
(37) 注11と同じ　三一頁
(38) 注19と同じ　五三頁、第五回内國勸業博覽會協賛會一九〇二『大阪と博覽會』
なお、日本の動物園成立史を編纂した佐々木時雄の『動物園の歴史 日本における動物園の成立』では、明治三一年十一月四日に榎本武揚が上野動物園へクロコダイルを寄贈したとの記載があるが、明確に上野動物園で展示されたかは確認できなかった。（佐々木時雄　一九七五『動物園の歴史 日本における動物園の成立』一九六頁）
(39) 注19と同じ　五四頁
(40) 文部省社会教育局　一九二九『昭和四年四月一日現在 教育的觀覽施設一覽』五頁
(41) 文部省社会教育局　一九三六『昭和十一年四月一日現在 教育的觀覽施設一覽』二頁
運輸省観光局　一九五七『観光資源要覧 第四編陳列施設』三一頁